

文 体 特 性 の 区 分

— On Differentiating Stylistic Characteristics —

岡 部 匠 一

1. 定 位 と 展 望

〈文体〉の区分の問題は、まず第一に、文体の概念の規定を必要とする。OED と Webster 3 IND から始めて、‘文体’についてのべられていることを探ってみよう。OED は、The manner of expression or characteristics of a particular writer (hence of an orator) or of a literary group or period (特定の作家—雄弁家—あるいは、特定の文学の流派、あるいは時代の特徴となる表現方法)として、‘文体’を定義し、さらに続けて、A writer's mode of expression considered in regard to clearness, effectiveness, beauty, and the like (明せきさ、効果、美しさなどを中心として考えられたある作家の表現様式)も‘文体’であると規定している。また、Webster によれば、‘文体’とは、Mode of expressing thought in language, oral or written; esp., such use of language as exhibits the spirit and faculty of an artist (話され、あるいは、書かれた言語における思想の表現方法であり、とくに、芸術家の精神と能力を示すような言語の使い方)であり、また、Characteristic mode of expression, as of a nation, period, person or school (国家、時代、人、あるいは流派の特徴を表わす表現様式)である。

ここで、文体の研究者を、マリーに代表させると、‘文体’とは、personal idiosyncrasy (個人のくせ) ; technique of exposition (叙述の技術) ; highest achievement of literature (文学が達成した最高のもの) の三つに分けて考えるべきものである。⁽¹⁾‘叙述の技術’を獲得する過程で、‘個人のくせ’が、その書き手の‘文体’として定着すると考えられる。また、‘文芸の達成した最高のもの’とは、‘個人的な独自の表現に普へん的な意味が完全に実現された’⁽²⁾‘絶対の文体’であるから、ここでOED と Webster 3 INDに、マリーの‘文体’の定義を加えると、‘文体’とは、③ 個人の作家の特徴を表わす表現方法 ; ④ 個人に表われ⁽³⁾て、個人を超える、国、時代、流派の特徴を表わす表現様式、とまとめられよう。たとえば Swift が、‘適切な位置に適切な語を置くことが文体の真の定義である’⁽⁴⁾(Proper words in proper places make the true definition of style) と言ったときの‘文体’は‘明せきさ効果、美しさなどを中心として考えられたある作家の表現様式’を一般化した意味での‘文体’と考えられ、③の場合であり、‘個人の作家の特徴を表わす表現様式’といえよう。また、archaic style⁽⁵⁾ (古典的文体) という場合の‘文体’は、④の意味での、‘特定の時代の特徴となる表現方法’と考えられる。

しかし、‘文体’の概念が、いま取りだした二つにとどまらないことは明らかである。⁽⁶⁾そのうえ、こんにちにいたるまで、‘文体’の概念内容についての、統一的な見解が、まだ研究者の間で得られてはいない。が、この点について、⁽⁷⁾『言語研究の諸問題』の誌上で行われた⁽⁸⁾文体の討論は、ひじょうに実り多いものであり、種々の見解がのべられた。なかには、文体の

存在自体も疑われることもあった。⁽⁹⁾ この結果、書きことばの文型において、いくつかの基本的な文体がとりだされた。そしてまた、その後、文体的手法と、その言語的本質を規定する試みもなされた。その結果‘文体’の境界は、考えられたよりも、はるかに複雑であることが分った。たとえば、話し言葉の文体は、一つの体系をなしているが、これを取りだして、他の文体と区別するためには、この体系が立っている基盤が確定されなければならない。

しかし、実用的な‘文体’の区別は、まず、いくつかの文体の対比によって行われる。このような対比は、二項的なものでなく、ある一つの文体は、他のすべての文体と対比される。しかし、多くの文体の中には、たがいに、ひじようにはっきりと対比される文体もある。文体相互間の対比が鋭いということは、たとえば、その二つの文体を特徴づけるほとんどすべての特性が相反的關係にあるということになる。そのような関係にある文体は、文学の‘文体’の一変種として表われる韻文の‘文体’⁽¹⁰⁾と、事務文書の‘文体’である。⁽¹¹⁾文学の文体には、三つの変種がある。① 韻文の文体、② 散文の文体、③ 劇の文体である。事務文書にも、いくつかの変種がある。① 国家間の関係の分野の外交文書、② 貿易と経済分野における商業通信文、③ 法律学の分野における法律の文書、④ 裁判の記録の文書、⑤ 官庁の命令、⑥ 議会の議決などがある。⁽¹²⁾ また、文学の文体は、学術的な散文文体に対比される。文学の文体の主要特性は、＜形象性＞であり、学術散文の最大の特徴は、＜構文型＞、＜語彙の選択＞、＜専門術語の使用＞、＜新語、新語義の形成＞である。⁽¹³⁾ 一般に、形象的、総合的、具体的思考としての文学の思考と、論理的、分析的、抽象的思考としての科学の考え方を、対比することは、広く知られている。しかし、文学の文体は、かなりはっきりと、他の文体、たとえば、公文書の文体とは対比される。公文書の文体では、すべての特性が、するどく、文学の言語の文体と対比されるので、それらの特性の混合が、文体的手法として用いられる。たとえば、事務文書には、⁽¹⁴⁾ 隠喩や⁽¹⁵⁾ 提喩のような文学の文書にみられる‘形象’がない。また、文学の文章には、公文書の文にみられるような特殊な語句(the above mentioned ‘上述の’)や、いろいろな略語(U. N.=United Nations ‘国連’)などがない。

2. 文体の辨別的特性

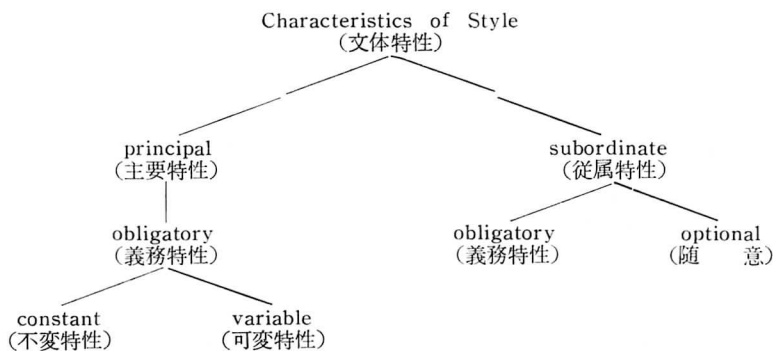
問題は、与えられた各々の文体の辨別的特性を基点として、それらの文体の‘独自性’、‘孤立性’をとりたて、そこから、すべて文体に対する対比性をとりだすことができるかということである。換言すれば、各々の文体は、その文体に固有の特性によって、他の文体と区別できるだろうか？ ということである。しかし、すぐ分るように、どんな文体でも、それ自身孤立した体系としては表われない。よく知られているように、学術的散文の不可欠の部分として表われる専門術語(科学、工業技術、芸術の発達と結ばれて新しく表われた概念を示す語)⁽¹⁶⁾がある。専門術語は、ふつうは感情的意味をもっていない。また、専門術語は、語の意味が一つであること(一義性)によって特徴づけられる。モスクワの大学の Galperin 教授は、「専門術語の使用の面は、学術的散文である。学術的散文においては、専門術語は、研究や実験の結果生じた新しい概念を表わすために用いられる。⁽¹⁷⁾」と言っている。この学術的散文の最大の特徴と考えられる専門術語は、ひじように多く、また多様な形で、用いられている。いまでは、プーシキンが、organism⁽¹⁸⁾ という語を使うことを読者に言いわけしなければならなかった時代は、昔のことになった。文学と詩の文において、専門術語は、

十分に広く用いられている。

同じことが＜⁽¹⁹⁾形象性＞についてもいえる。この＜形象性＞は、詩の言語から切り離すことはできない。‘形象性’は、思考の特性ではなくて、詩の言語の中で生まれた文体的手法である。しかし、‘形象性’は韻文だけにとどまてはいない。‘形象性’は、演説体の文章に、新聞の文章に、さらに学術的散文の多くに用いられている。

多くの文体は、他の多くの文体の体系から、いろいろな特性によって区別されうる。その中で、＜構成素間の相関々性＞は、決して少ない位置を占めていない。各々の文体の特性として、＜特性の間の相関関係＞は、その＜特性の存在自体＞よりも大きな役割を演ずる。

文体の最も一般的な特徴をとりだして歸納的に考究して行くと、つぎのような対比と特性化が得られる。すなわち、各々の文体は、多くの特性をもっているが、その中で、＜主要特性＞と＜従属特性＞がある。‘主要特性’は、こんどは、与えられた文体の変種との関連で、＜不変特性＞と、＜可変特性＞に分けられる。さらに、‘従属特性’は、‘義務特性’と、‘任意特性’に分けられる。しかし、‘主要特性’と‘従属特性’のこの二面が、からみ合っているのは当然である。心に留めておかなければならないことは、‘主要特性’は、つねに、‘義務特性’であり、‘従属特性’は、個々の文体においては、‘非義務的’、‘随意的’なものとして表われることがある。この‘特性間の相互関係’は、次のような形で表わされよう。



この表を例証する具体的な例として、学術的散文の文体を考えてみよう。学術的散文の‘主要特性’は、専門術語 (terms) が多いことである。⁽²¹⁾すべての専門分野のテキストにおいて、その文体の‘主要特性’は、‘専門術語 (群)’の存在であるばかりなく、一般的な意味での＜専門用語＞である。たとえば、rate of interest (利率) とか loan (貸付金) のように。この‘専門用語’は、ふつうは、なんらの感情的色彩がなく、このような語に対しては、コンテキストは、ある一方向にのみ働らく。すなわち、もし、このような‘専門用語’が多くの意味を持っていたばあい、コンテキストは、この‘専門用語’のただ一つの意味を実現する方向に働らく、この語の＜対象・論理意味＞を実現する方向に働らく。学術的散文の‘専門用語’および、‘専門語彙’は、つねに既知量として表われるということである。この語彙の既述性——その意味がすでに分っていることは、——学術的散文では、大きな意味をもっている。学術的散文のテキストでは、新しい予期しない専門術語が表われるばあいが、ひじょうにまれであることに注意されたい。しかも、これらの、新しい、予期しない専門術語の出現は、ある程度、先行するコンテキストによって、あらかじめ準備されている

ので、その術語自体の出現は、規則的であると受けとられている。また、このような新しい専門述語の生起は、ふつうは、テキストの序論部で表われる。

専門用語および、専門術語の単語の‘既述性’は、話者の注意を、テキストの他の要素に向ける。学術専門文体における情報自身が、一般的語彙と、（専門術語をふくめた）専門術語との間の関係の中にこめられている。

ひじょうに高度の、専門術語群、および専門用語群の‘既述性’は、しばしば、記号化にみられる。近年における、ある約束の上に立つ＜符号＞や＜公式＞は、物理、数学、化学ばかりでなく、多くの人文科学、たとえば、経済学や言語学などの学門の共有財産でもある。

しかし、‘符号’や‘公式’は、学術的な散文の‘従属特性’でもある。この従属特性は、＜専門術語性＞の機能である。学術的散文のあるテキストにとっては、これらの‘符号’や‘公式’があるということ——‘専門術語性’——は、‘義務的特性’である。たとえば、数学、化学、生物学などのテキストにおけるように。他の学問のテキストに対しては、この‘専門術語性’は、‘随意的’なものである。たとえば、言語学や経済学、歴史学、自然科学や、他の主な人文科学のテキストにおけるように。

それゆえ、‘専門術語性’は、学術的散文の‘主要特性’である。そして、この特性は、‘不変特性’である。しかし、‘主要特性’の中からも‘可変特性’は、とりだされる。そして、学術的な散文の‘可変特性’は、専門書の中にみいだされる＜文法構造⁽²³⁾＞である。この‘文法構造’は、叙述が論理的に一貫している厳密な、たとえば、学術的散文の体系から生じてくる、＜接続詞の体系⁽²⁴⁾＞である。この‘文法構造’という特徴の可変性は、学術的散文を特徴づける＜構文型⁽²⁴⁾＞によって示される。すなわち、学術的散文の＜構文型＞では、主要な思想が主文を占め、副次的思想が従属節によって表現され、各々のパラグラフは、その前のパラグラフの思想を継承して、直接的に前のパラグラフからできて、この前のパラグラフに接続する手（要素）をもっている。

そして、この‘構文型’は、まず第一に、外言語的な諸要因の働きによって生みだされるものであるという事情によって、規定される。連続性、論理性、明せき性、簡潔性は、この文体の特性として表われるが、つねに、非言語的な要請によるものと考えられるべきである。

‘構文型’は、学術的散文だけを特徴づけるものとしてとりだされることはない。が、にもかかわらず、＜構文型＞は、学術的散文の‘主要特性’として取り扱われることもありうる。学術的テキストの‘構文型’においては、とくに、＜発達した接続詞の体系＞が注意をひく。よく知られていることは、まさに、学術的散文において、もっとも用いられることの少ない接続詞や、接続の成句の使用がみられることである。‘接続の成句’は、この学術的文体の中でつくられて、‘主要特性’を獲得する。たとえば、in consequence of (…の結果)、in connection with (…に関連して)などは、学術的散文の‘接続成句’である。

学術的な文体の、すべての‘主特性’、‘従特性’を数えあけることは別の機会にゆずって、ここでは、＜随意的＞といわれる‘従特性’の一つだけを示そう。それは、すでにふれた、文の＜形象性＞である。この特性は、学術的散文体に、まったく無縁であるわけではない。しかし、この‘形象性’は、学術的散文の直接的な構成素ではなく、それゆえ、この‘形象性’は、学術的散文の、＜非義務的特性＞と考えられる。‘形象性’からでてくる文体的手

法、たとえば、隠喩、換喩、対照、⁽²⁵⁾‘迂言’などは、学術的散文を特徴づけるものではない。学術的散文は、‘形象性’の基礎の上に置かれていないし、また、学術的散文は、この‘形象性’をなしにすまうことができる。しかし、‘形象性’は、あるかぎられた範囲内においては、学術的散文体の中に表われる。しかし、学術的散文において、‘形象的方法’の過度の使用は、この散文の体系を動揺させ、あるいは、この文体の規範に違反することになる。

文体の‘随意特性’の使用に際して見られる、いま一つの、あまりめだたない特徴がある。この‘随意特性’は、その第一義の意味で用いられてはいないとはいえ、その本質において、‘主要特性’から区別されている。この‘随意特性’は、質的に、‘主要特性’とは異なっている。それゆえ、学術的散文の‘専門術語’や‘専門語’は、文学の文体の専門術語や、専門用語としてはふさわしくない。まさに、韻文における‘形象性’は、学術的散文の‘形象性’には、ふさわしくない。学術的な散文においては、‘形象性’は慣習的なきまった形のもので、多くは、かなり事前に分っている言語単位として解され、また、そう感じられる。学術的散文における広い意味での比喩的表現は、知識を伝達する機能は擔っていない。学術的散文での比喩的表現は、論理的な言語単位——語や語句——の同義語の一種として表われ、文章の表現に、より生き生きとした感情的色彩を与えるものである。

注

- (1) Murry, J. M., *The Prose Style*. 1952⁸, p. 8.
- (2) ‘…absolute style is the complete realization of a universal significance in a personal and particular expression,’ *ibid.*, p. 8.
- (3) ‘…しかし前著が文学の文体を、言語の主体としてみたのに対し、本書は、それを、個人の主体としてみようとしたもので…’ (傍点筆者), 東田千秋, 『主体論』昭34, p. iv.
- (4) *OED* s. v. ‘style’
- (5) *Webster 3 IND* s. v. ‘style’
- (6) 岡部, ‘ソヴィエトにおける英語学—ガルペリンの文体論,’ 『かりばね』No. 1, 1961, p. 6-8. 参照。
- (7) Galperin, I. R., *Očerki po Stilistike Anglijskogo Jazika. (Course in English Stylistics)* 1958, p. 9.
- (8) *Voprosi Jazikoznania (problems of linguistics)* No. 1 6. 1954.
- (9) Sopokin, *ibid.*, ‘K voprosy ob osnovnich ponjatach stilistiki,’ *Voprosi Jazikoznania*. No. 2, 1954.
- (10) Galperin, *op. cit.*, p. 43-103.
- (11) *ibid.*, p. 350.; また, Galperin, ‘K probleme differentsiatsii stilei reci,’ (on the problem of differentiating styles of speech), *Problemi Sovremennoi Filologii. (Problems of Modern Philology)* 1965 (Moscow), p. 68.
- (12) ‘事務文書の基本的な目的は、両者の共同、すなわち、両当事者の事前協定を達成することである。’ Galperin, *Očerki*. p. 431.
- (13) *ibid.*, p. 351 & p. 424.
- (14) ‘…元来、隠喩は、…「転用」を意味したのであり、具体的にいうと、一つの名称もしくは記述

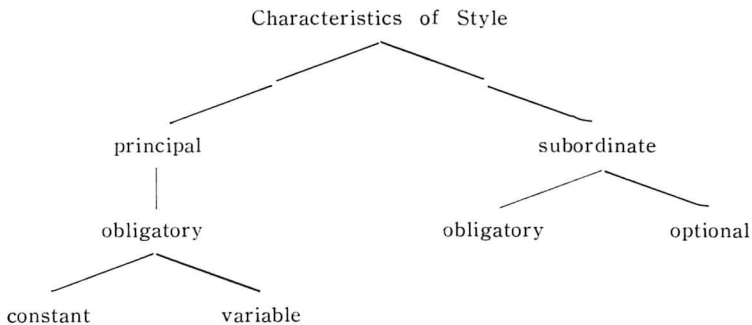
的用語を、その本来のものとは相異しているが、それと analogous なものえ転用することを意味したのである。’ 鍋島、『文体美学』昭37, p. 299; ‘エリサベス朝における定型的隠喩、たとえば、「真珠のごとき歯」‘pearly teeth’, 「象牙のよううなじ」‘ivory necks’ というもの、また十八世紀における定句「海原」‘watery plain’, 「白銀の流れ」‘silver stream’, というものなどは、いずれも時代共通の詩的隠喩の最も有名な例であろう。’ (*ibid.*, p. 294.); 「こうしてけっきよく、隠喩は文学作品においては、作家の言語表現ならびに美意識の表出手段として究極的な本質を持ち、ことに文体研究における最も重要な部分に触れることになるのである。’ (*ibid.*, p. 244. 傍点筆者)

- (15) ‘換喩は、隠喩と同じように、一方では、新語創造の方法であり、他方では、文体的手法である。それえ、換喩は、「言語の換喩」と「ことばの換喩」に分けられる。old age のかわりに gray hair を, drunkenness を bottle で表わすのは、「言語の換喩」で, from the cradle to the grave のばあいの, cradle で, ‘誕生’を, grave で‘死’を表わすのは、文学的意味をになった, ‘ことばの換喩である。’ Galperin, *Ocherki*, p. 130.
- (16) *ibid.*, p. 58.
- (17) *ibid.*, p. 58.
- (18) Galperin, ‘K problme differentsiatsii stilei reci,’ p. 68.
- (19) ‘文学の文の最も重要な特性は、‘形象性’である,’ Galperin, *Ocherki*. p. 351. ; ‘形象性は、ふつうは、学術的散文の特徴ではない。それゆえ、学術的散文には、隠喩、換喩、誇張法、対比、その他の‘形象’をつくる方法がまれにしか見られない。’ (*ibid.*, p. 424.); The three main functions of poetic imagery may be classified under the headings symbol, metaphor, and simile, though there are of course others. (Robin Skelton: *The Poetic pattern*, 1956. p. 92.) ‘詩的形象の三つの主要な機能は、象徴、隠喩、および直喩の項目の下に分類される。勿論ほかにもあるが。’) [Quoted by 鍋島, 『文体美学』昭34, p. 182.]
- (20) ‘義務特性,’ ‘任意特性’の術語は、Galperin 教授の ‘K probleme differentsiatsii stilei reci’ で使われている用語を, Roberts, (*English Syntax*. 1964, 1966 [開文社], p. 81.) の ‘obligatory’ (義務的), ‘optional’ (随意的) で、置きかえたものである。
- (21) Galperin 教授は、Cronin, の *The Citadel* (1937) をあげて, cyst (のう胞) typhoid (腸チフス), pneumonia (肺炎) の医学用語を ‘専門術語’ としてあげている。 [*Ocherki*. p. 58.]
- (22) 岡部, ‘誤彙的意味の型,’ 『かりばね』 No. 3. 1963, p.
- (23) Galperin, *Ocherki*. p. 426.
- (24) *ibid.*, p. 426.
- (25) ‘Use of a longen phrasing in place of a possible shorter and plainer form of expression, as use of a negative, passive or inverted construction, naming by descriptive epithet (短かくてより易しい表現の代りに、長い表現を用いること。たとえば、否定、受身、あるいは、語順が逆になっている表現の使用、形容詞を使って、(ある概念)をいうこと) [Webster 3 IND. s.v. ‘periphrasis’]: ‘I understand you are poor, and wish to earn money by nursing the little boy, my son, who has been so permanently deprived of *what can never be replaced*.’ (私は、きみが貧乏だと思ふよ。だから、かけがえのないものを永久に奪われた小さな子供たちを世話して金をかせぐことを望んでいると思ふよ。)’ [Galperin, *Ocherki*, p. 158.]

Résumé

Stylistics is multi-fariously defined, but in the present writer's opinion two of them seem to be adequate to the linguistic analysis of various stylistic characteristics. For this purpose stylistics is a. mode of expressing thought or feeling in such a way as to exhibit the spirit and faculty of an artist; b. characteristic mode of expression as of a nation, period or school.

In this paper stylistic characteristics are elicited in the frame of the latter definition of style. This analysis assumes that each style is differentiated from other styles by its own peculiarities and that some of these peculiarities are characteristic of some genres of styles. The resultant scheme of various stylistic characteristics follows. (To illustrate this scheme a scholarly prose style is taken in the body of this paper.)



The writer would like to express his indebtedness to professor Galperin at Pedagogical Institute of Moscow University for an offprint of his monograph ('K probleme differentsiatij stilei reci' 1965. Moscow.) which he sent me personally.